

*World's
Famous
Classics*

74

全集

ÉTROITE, LA SYMPHONIE PASTORALE, etc.

中村真一郎 若林真訳

門田園交響樂

ほか

世界文学全集——74

ジッド

1974年9月18日第1刷発行

訳者 中村真一郎／若林 真

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社 東京都文京区音羽2-12^ノ21

郵便番号 112

電話 東京 03(945)1111(大代表)

振替 東京 3930

製版所 株式会社まゆら美研

印刷所 廣済堂印刷株式会社

製本所 大製株式会社



© KODANSHA 1974 Printed in Japan

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

定価はカバーに表示してあります。(文3)

目次

背徳者	若林 真訳	3
狭き門	中村真一郎訳	119
イザベル	若林 真訳	245
田園交響楽	中村真一郎訳	327
解説（付・参考文献）・解題・年譜	若林 真	385

写真撮影 稲生 永／若林 真

資料提供 若林 真

装幀 アド・ファイブ

背徳者

アンリ・ゲオンにささげる
率直なる友 A・G・

若林 真訳

われなんじに感謝す、われは
畏るべく奇しくつくられたり。

詩篇 一三九篇一四節

『背徳者』主な登場人物

ミシエル——本編の主人公。考古学者。将来を嘱望された学究だが、瀕死の父を安心させるため、四歳年下のマルスリーヌと、男としての愛情も抱かずに結婚する。北アフリカに新婚旅行に旅立ち、チュニスに上陸し、馬車のなかで咯血、オアシスの町ビスクラで病を養う。やがて新妻マルスリーヌの献身的な看護で回復したミシエルは生の歓喜を発見し、以後、生命に異常なまでの愛着をおぼえる。

マルスリーヌ——ふたりの兄弟と暮らしていた孤児だったが、急にミシエルと結婚する。発病したミシエルを献身的に看護するが、パリに戻ってから、結核に犯される。その後でふたたびアフリカへ夫とともに旅立ったマルスリーヌは灼熱のなかで死を迎える。

メナルク——パリでホテル住まいをするミシエルの友人。ミシエルのものの見方に影響を与える。

ボカージュ——ラ・モリニエールにあるミシエルの所有する農園を番する老人。律儀に収益をあげようとつとめている。

シャルル・ボカージュ——ボカージュ老人の息子。アランソン近辺の模範農園で学んでいるが、ミシエルの農園に戻ってくる。均整のとれた美青年。ミシエルに領地の収益をあげるため、いろいろ意見を述べる。

ウルトヴァン——ミシエルの領地の伐採の指図をする材木商。

ビュット——伐採の手助けをする剽軽者。

モクテイル——ビスクラの黒人少年。

序

わたしは、この書を、ありのままの価値で世に問う。

これは苦い灰にみちた果実である。灼熱の石灰地に生える砂漠のコロシントのようなものであり、のどの渴きをいっそうむごくやけただれるようにするものでしかないが、しかし、金色の砂漠では美しくないとはいえぬ。

もしわたしがこの書の主人公を模範として示したならば、成功しなかったことは明らかである。ミシエルの冒険に興味をよせて下さった数少ない人たちも、実は彼らの善意の総力をあけて、ミシエルを辱しめようとの魂胆があつてのことだったのだ。わたしがマルスリーヌをあれほどの美徳でかざつたのは無駄ではなかった。人びとは、ミシエルがおのれよりもマルスリーヌのほうをよしとしなかったことを、赦さなかったのだから。

また、もしわたしがこの書物をミシエルに対する告発状としたならば、同じく成功しなかっただろう。なぜなら、だれひとりとして、わたしの主人公への憤激がわたしのおかげだと感謝してくれた者はなかったからで

ある。人びとはこの憤激を、わたしの意に反するものとして感じているかのようにだった。この憤激はミシエルからわたし自身に及び、もうすこしでわたしとミシエルを混同するところだった。

しかしわたしは、この書物で告発も弁明もおこなうつもりはなく、是非の判断をさしひかえていたのだった。今日の読者は、作者が話の筋を描いたのちに賛否いづれなのかその態度を明らかにしないことを許してくれない。それどころか、ドラマの進行中においてさえ、作者が腹をきめて、アルセストに組するかフィラントに組するか、ハムレットに組するかオフェリアに組するか、ファウストに組するかマルグレーテに組するか、アダムに組するかエホバに組するか、その態度を明確にせよと迫っているのである。もちろんわたしは、中立（逡巡といつてもよからう）が偉大な精神のたしかな証しだと主張するつもりはないが、多くの偉大な精神は結論を下すのを……大いに嫌っていたし——ひとつの問題が立派に提起されたからといって、あらかじめ解答が出されていることにならないと思う。

わたしはここで心ならずも《問題》という言葉をつかうが、実をいって、芸術に問題などというものはないのだ——作品自体がその充分な解答でないような問題は。

もし《問題》ということをも《ドラマ》と解するならば、この書物に語られていることがらは、わたしの主人公の魂それ自体のなかで演じられているものであるにせよ、あまりに普遍的なものであるがゆえに、彼独自の冒険のなかに限定するわけにはいかない。わたしは、この《問題》を創り出したのは自分だなどと主張するつもりはない、それはわたしの作品以前に存在していた問題であり、ミシエルが勝とうが負けようが、《問題》は存続するのだ。そして作者は勝敗のいずれをも既知のこととして提示しはしない。

もし幾人かの優れた精神の持ち主がこのドラマのなかに特異な一例の報告しか見ようとせず、主人公にひとりの病人しか見ようとしないならば、また、きわめて切実で、きわめて一般的な関心をひくいくつかの観念がこのなかに含まれていることを見落としたならば——その責めはそれらの観念にも、そのドラマにもなく、作者自身にある。つまり作者がこの書物に情熱のすべてを、涙のすべてを、配慮のすべてをつぎこんだにしても——才腕がなかったからなのである。しかし、作品の真の興味と、その日かぎりの読者が作品に抱く興味とは、かなりの隔たりがあつてあいれない。愚にもつかぬものがありがたがる読者大衆を、やみくもに夢中にさせるより

は——興味あることがらを内に包みながらも、はじめは人びとの興味をひかなくてもかまわぬという危険を冒すほうを好んだところで、うぬばれがすぎることになるまい、と思う。

要するにわたしは、なにごとく証明しようとせず、よく描き、自分の描いたものをよく明るみに出そうと努めただけなのである。

内閣総理大臣 D・R 氏へ

シデイ・b・M 一八九三年七月三十日

そう、兄上のお察しのとおりでした、ミシエルはぼくたちに打ち明けました。彼の話は以下のとおりです。兄上はそれをお求めでしたし、ぼくはお約束をいたしました。兄上は、送ろうとする今となつても、ぼくにはまだためらいがあります。読み直してみればみるほど、恐ろしいものになります。ああ！兄上はぼくたちの友人をどうお考えになるでしょうか？それに、ぼく自身どう考えているのでしょうか？……残忍ともみえる性質も善導できるということを否定して、芸もなくぼくたちは彼を責めようとしているのでしょうか？——しかし、この物語のなかに自分の姿をあえて認めようとするものが、今日ひとりならずいるのではないかと、ぼくは懸念しております。これほどの知性と力の使い道が見つかるのでしょうか——それとも、こんなものには市民権を拒みうるのでしょうか？

ミシエルには国家に役立ちうる方途がないでしょうか？正直に申しまして、ぼくにもそれがわからないの

です……。彼には仕事が必要です。数々の偉大な功績により兄上が占められた高い地位、兄上の握つていらつしやる権勢のお力で、その仕事を見つけていただけないものでしょうか？——急いで下さい。ミシエルは献身的な男です、今なおそうです、しかし間もなく、自分自身にしか献身しなくなるでしょう。

ぼくは澄みきつた青空のもとでこの便りを認めております。ドニとダニエルとぼくがここに来てから十二日になります。雲ひとつ、日のかげりひとつありません。ミシエルの話では、二カ月も空は晴れわたつてのことです。

ぼくは悲しくも嬉しくありません。ここの空気はひどく茫漠とした興奮で人びとの心を満たし、楽しみも苦しみも、ともに遠いような心の状態を体験させてくれます。おそろくこれが幸福というものなのでしょう。

ぼくたちはミシエルの傍にいて、彼と別れたくないのです。この物語をお読みくだされば、理由はおわかりいただけるかと存じます。だからこそ、この地の彼の住居で、ぼくたちは兄上のご返事をお待ちしているのです。早々にお願いたします。

ご存じのように、学校仲間としての友情から、すでに

ドニとダニエルとぼくはミシエルに固く結ばれていたのですが、この友情は年々大きくなっていました。ぼくたち四人のあいだに契約みたいなものが取り決められ、仲間の一人からのどんなにささいな呼びかけにも、他の三人は応ずることになっておりました。だからミシエルから危急を告げる不可思議な叫びを受けとるや、ぼくはただちにダニエルとドニに知らせ、三人ともすべてを放擲して出発したのです。

ぼくたちは三年このかたミシエルに会っておりませんでした。彼は結婚し、細君を旅に連れていきました。彼がこの前パリに立ち寄ったときには、ドニはギリシアに、ダニエルはロシアに、このぼくはご存じのとおり病臥の父の傍におりました。ところで、消息がなかったわけではありませんけれど、彼に会ったシラスとウィルの便りに接して、ぼくたちはただただ驚くばかりでした。ぼくたちには釈然としないひとつの変化が、ミシエルの内心に起こっていたのです。彼はもはや往年の学識豊かなピューリタンでなくなっておりました。確信あるがゆえにぎくしゃくし、ぼくたちのあまりにも放埒な話の腰を折るほど澄みきった眼差しをもったあのピューリタンでなくなっておりました。それは……しかし、彼の物語を読めばおわかりになることを、先走って申し述べる

必要もありますまい。

さて、この物語を、ドニとダニエルとぼくが彼から聞いたとおりに、兄上にお伝えいたします。ミシエルはテラスで話をしたのでした。ぼくたちは彼のそばで、暗闇のなか、星明かりのなかに、寝そべっていたのでした。話が終わったときに、ぼくたちは太陽が平野に昇っていくのを目にとめました。ミシエルの家からは、平野も、ほど遠からぬ村も見わたせます。暑いうえに作物がすっかり刈り取られているので、平野には砂漠の趣があります。

ミシエルの家は、みすばらしく奇妙なものでしたが、風情がありました。冬はさぞ寒いことでしよう、窓にはガラスがなく、というよりむしろぜんぜん窓がなく、壁には大きな穴がいくつもあいているからです。お天気がいいので、ぼくたちはござを敷いて戸外で寝ます。

申しおくれましたが、ぼくたちはつつがなく旅程を終え、暑さに疲れ果て、新しい雰囲気に陶然となって、夕方この地に到着しました、アルジェとコンスタンティヌにはほんのちよつと足をとめただけです。コンスタンティヌから新設の鉄道で、シディ・b・Mまでまいりました、一台の幌馬車が待っていました。街道は村のずっと手前で途切れています。この村はウンブリアのい

くつかの部落のように、岩の上にのっかっております。ぼくたちは歩いて登りました。二頭のらばがぼくたちのかばんを運んでくれました。この道からはいると、ミシエルの家が村のとつつきになります。低い塀で閉ざされた庭、というよりもむしろ囲い地が家を取りまいており、曲がりくねったざくろの木が三本、みごとな夾竹桃が一本植わっております。カピリア人の少年が一人そこにいましたが、ぼくたちが近づくと、なりふりかまわず塀をのりこえて逃げていきました。

ミシエルは喜びの色も見せずに、ぼくたちを迎え入れました。彼はひどくそっけなく、愛情が表に現われるのを恐れているかのようでしたが、まず戸口のところでぼくたち三人それぞれに、しかつめらしく接吻をしました。

夜までにぼくたちは十言と言葉をかわしませんでした。驚くばかり豪華な装飾のサロンに、粗末といつていほどの食事が用意されておりましたが、そのわけはミシエルの物語をお読みくださればおわかりになりますでしょう。それから彼は、わざわざ自分でコーヒーをつくって供してくれました。つづいてぼくたちはテラスにさがりました、眺望が果てしなくひろがっております。ぼくたち三人は、*ヨブの三人の友だちさながらに、

火のように燃える平野へ急激に沈んでゆく太陽に見とれながら、待ちもうけておりました。

夜になってからミシエルは語りはじめました。

*訳注 ヨブ記第二章十一節参照「時にヨブの三人の友このすべての災禍の彼に臨めるを聞き、各々おのれの処よりして来れり。すなわちテマン人エリバズ、シュヒ人ビルダデおよびナアマ人ゾバル是なり、彼らはヨブを弔りかつ慰めんとて互いに約して来りしが……」

第一部

一

きみたち、ぼくはきみたちが誠実な友だと知っていた。ぼくの呼びかけに、馳^はせ参じてくれた、きみたちの呼びかけがあったら、ぼくがしただろうように。しかし三年来、きみたちはぼくに会っていなかったわけだ。これほど会わずにいても、きみたちの友情はびくともしなかったのだから、ぼくがこれからする話にもびくともしないではしい。ぼくがとつぜんきみたちを呼び求めて、こんな遠い住居にまで旅させたのも、ただただきみたちに会い、話を聞いてほしかったからだ。きみたちに語りかける以外の救いなど、ほしくない。——つまりぼくは、わが生涯の、乗りこえようのない地点にまできているのだ。かといって、精根つきはてた、というようなことでもない。もうわからないのだ。ぼくは……。そう、ぼくは話したいのだ。自分を自由にする術^{すべ}を心得ることなどなんでもない、困難なのは自由な状態のままにとどまっ

ている術^{すべ}を会得することだ。——身の上話をすることを許してくれたまえ。これから、ざつくばらんに、謙遜も自慢もぬきに、わが心に語りかけるよりもざつくばらんに、ぼくの生活を話そう。聞いてくれたまえ。

思い出すが、ぼくらがこの前会った場所は、アンジェ近郊の田舎の小さな教会だった、ぼくの結婚式が挙げられていたのだ。列席してくれた人たちは数少なかったが、すばらしい友人たちがきてくれたおかげで、あの月並みな儀式も心にしみるようになった。みんなが感動しているように思われて、ぼく自身まで感動していた。ぼくの妻となった女の家で、笑い声もどよめきもない簡単な食事の会が催され、教会を出ると、きみたちはぼくらといっしょになった。それから、用意されていた馬車でぼくらは型どおり運ばれていった。ぼくら心のなかでは、結婚という観念は出発のプラットフォームの影象と、習慣的に結びついていくからね。

ぼくは妻のことをろくすっぱ知らなかったし、彼女のほうでもそれ以上ぼくを知っているわけではないと考える、あまり苦にならなかった。ぼくは男としての愛情も抱かずに彼女と結婚した。ぼくをひとりぼっちにして

世を去るにしのびない父の意を迎えるのが、結婚の主な目的だった。ぼくは優しい気持ちで父を愛していた。父の瀕死の苦しみに気もそぞろだったぼくは、その悲しい瞬間に、父の最期を安らかにしてやることしか念頭になかった。こうしてぼくは、人生の何たるかも知らずに、人生に乗り出したのだ。瀕死の父の枕辺で交されたぼくらの結婚の約束は、陽気なものでなかったが、厳肅な喜びがなくもなかった。それほど、ぼくらの婚約による父の安心は大きかったからだ。たしかにぼくは男としての愛情をフィアンセに抱いていたわけではないけれども、かといってそれまでに他の女を愛したことがあるのでもなかった。ぼくらの幸福を保証するには、それだけで充分に思えた。そして、まだおのれを知らなかったぼくは、彼女にすべてを捧げるつもりになっていた。彼女もまた孤児で、ふたりの兄弟と暮らしていたのだ。このマルスリーヌは二十歳そこそこで、ぼくは彼女より四つ年上だった。

すでに述べたように、ぼくはまったく彼女を異性として愛してはいなかった。すくなくとも世にいう情愛などは、まるっきり彼女に感じなかった。しかし、情愛を、優しさ、一種の憐憫、かなり大きな尊敬と解するなら、やはり彼女を愛していたことになろう。彼女はカトリッ

クだった。ぼくはずっとプロテスタントだ……でもぼくは、自分のプロテスタントとしての信仰などとるに足らぬものと思っていた！ だから、カトリックの司祭はぼくを受けいれ、ぼくは司祭を受けいれ、結婚式は支障なくおこなわれた。

父は、いわゆる《無神論者》だった、——すくなくともぼくはそうだと思っている。父親ゆずりとおぼしい、どうにもならぬ羞恥心のようなものがあって、ぼくはかつていちども父とその信仰について語ったことがなかったのだ。母から受けた新教徒の厳格な教えは、母の美しい面影とともに、すこしずつぼくの心から消えていった。知つてのとおり、母は若くして世を去つたのだ。子供のころ最初に受けた道徳教育がどれほどぼくらを制御するものであるか、精神にどんな襞を残すものであるか、まだぼくは思いもおよばなかった。ぼくは母から厳格さを尊ぶ徳義心を教えられ、厳格さへの嗜好を植えつけられ、それを研究にまでそっくりもちこんだのだ。母を亡くしたとき、ぼくは十五歳だった。父が多くの面倒を見、世話をやき、教育に情熱を傾けてくれた。すでにぼくはラテン語とギリシア語をかなり会得していた。さらに父についてヘブライ語、サンスクリットをすみやかにおぼえ、ついにはペルシア語とアラビア

語にまで及んだ。二十歳のころ、多くの勉強ぶりときたら、まことに熱っぽく、父が自分の研究にくわわらせようと思ひ立つたほどだった。父は嬉々として、よくを同輩扱いにし、その証拠を見せたがった。父の名で発表された『プリギア人の祭祀についての試論』は、多くの仕事だったのだ。父がろくすっぽ校閲もしなかった論文なのに、かつてないほどの賞讃を博した。父は大喜びだった。ぼくはといえば、こんなペテンが成功したことに当惑していた。しかし、以後ぼくは世に出るようになった。博識無類の学者たちが、よくを仲間扱いにしてくれた。こんな光榮にあずかったことが、いまとなつてはこそばゆい……。こうしてぼくは二十五になるまで、廃墟と書物以外のものをほとんど何ひとつ見つめることなく、人生のことなどつゆ知らず、仕事に異常な情熱を消費していた。ぼくは幾人かの友人（そのなかにきみたちもはいるのだが）を愛していたが、友人よりはむしろ友情のほうを愛していた。友人たちへのぼくの献身ぶりはたいへんなものだったとはいえ、それは高潔たらんとする欲求だった。何であれ内心の美しい感情を、いつくしんでいたのだ。要するにぼくは、自分自身を知らないと同じように、友人をも知らなかったのだ。別な生活が送れるかもしれない、別な生き方ができるかもしれないな

どという考えは、ただの一瞬も頭にうかぶことがなかった。

父もぼくも、質素なもので充分だった。ふたりともごくわずかな金しか使わなかったもので、ぼくは二十五になるまで、家が金持ちだということを知らなかった。折にふれてなんとなく、どうにか食っていけるだけのものが家にあるのだらうと、想像するのだった。父のそばにいて、儉約の習慣が身についていたので、家にははるかに多くの財産があると悟ったとき、なんだかぐあいの悪いような気持ちになった。そういう事がらに、こうもうといぼくだったから、自分の財産のことをいくぶんはつきり意識するようになったのは、自分が唯一の相続人たる父の死後でさえなく、やっと、夫婦の財産契約をかわしたときのことだった。マルスリーヌに、ほとんど持参金がないことに気づいたのも、そのときだ。

ぼくが知らなかったもうひとつのこと、おそらくもっと重要なことは、自分がとてもひ弱な体質だということだった。健康を試してみたことのないぼくに、どうしてそれがわかるう？　ぼくはときどき風邪を引き、いいかげんな治療をしていた。ぼくの送っていたあまりにも平穩な生活が、ぼくを弱らせもし、また護ってくれてもいたのだ。あべこべにマルスリーヌは丈夫そうだった

し、——事実ばくより丈夫だった。それはやがてぼくが知らなければならぬことだった。

結婚式の当夜は、二部屋用意させておいたパリのぼくのアパルトマンで寝た。どうしても必要な買い物をするあいだだけ、ぼくらはパリにとどまり、それからマルセイユに着き、ただちにチュニスに向けて船出した。

さしせまったいろんな用事、あまりにも目まぐるしく推移した最近の出来事、ひときわ身にしみる喪のすぐあとにきた結婚の、避けがたい感動なので、ぼくはへとへとになっていた。船上の人となつてやつと、疲労を感じとることができた。それまであれやこれやの用事で、実のところ疲労はつのるばかりなのに、かえつて感じないでいられたのだ。船上でのやむをえぬ閑暇のおかげで、ようやくぼくも思いをめぐらすことができるようになった。そんなことは、これがはじめてのような気がした。

そしてまたはじめてぼくは、長いあいだ研究から遠ざかることを承知した。それまでは、短い休暇しか自分に許さなかったのだ。母の死後まもなく父とともにしたスベイン旅行、実のところそれは一月以上^{ひとつくわい}にわたるものだった。もうひとつのドイツ旅行は六週間、ほかにもい

ろいろあるが、——いずれもきまつて研究旅行だった。父はきわめて綿密なその研究から、旅行中も気をそらすことはなかったし、このぼくも父についていけないときには、ただちに読書をしたものだった。ところで、マルセイユを離れるやたちまち、グラナダやセビリアのさまざまな思い出、澄みわたった空、くつきりとした影、お祭り、笑い声や歌声などがよみがえつてきた。これからそういうものに、まためぐり会おうとしてるのだ、と考えた。ぼくは船の甲板にのぼつて、マルセイユが遠ざかつてゆくのに眺めいった。

それからとつぜん、マルスリーヌを少々ほつたらかしにしたことに思ひいたつた。

彼女は船首に腰をおろしていた。近よつていったぼくは、まさしくはじめてまじまじと彼女を見つめたのだ。

マルスリーヌはたいそうきれいだった。きみたちは彼女に会つたことがあるのだから、知つてゐるだろう。はじめそうと気づかなかつたことに、気がとがめた。こと新しく彼女を見るにしては、知りすぎていたのだ。ぼくと彼女の家は、しょっちゅう往き来していたし、彼女の成長もぼくは見てきたので、その美しさに慣れつこになつていたのだ……。はじめてぼくは目をみはつた。それほど彼女の美しさはすばらしく見えた。

あつさりした黒の麦藁帽の上に、大きなウェールをなびかせていた。彼女は金髪だったが、華奢には見えなかった。対のスカートとコルサージュは、スコットランドのシヨール地で仕立られたもので、ぼくらがいっしょに選んだものだった。ぼくの喪のために、彼女が陰気な身なりなどしてほしくなかったのだ。

ぼくからじろじろ眺められていることに気がついて、彼女は振り向いた……。それまでのぼくは、彼女に対してうわべの熱情しか抱いたことがなかった。ともかく、いわば冷たい愛想のようなものをもって、愛情のかわりにしていたのだ。彼女がそんな態度をいささかわずらわしがつていることは、ぼくにもよくわかつていた。そのときマルスリーヌは、ぼくからはじめて別な目で見られていることに気がついたのだろうか？ 今度は彼女がぼくをじいっと見つめ、それから、たいそう優しくほほえみかけてきた。ぼくは無言のまま、彼女のそばに腰をおろした。そのときまでぼくは、自分のために、すくなくとも自分流儀に生きてきたのだ。結婚はしたが、女房のなかに友人以外のものがあるとは想像もしなかったし、結婚によつて自分の生活が変わるかもしれないなどは、思つてもみなかったのだ。やつとぼくにわかつたところだった、独白も終わるだろうということが。

ぼくらはふたりだけで甲板にいた。マルスリーヌはぼくのほうに顔をさし出した。ぼくは優しく抱きしめた。目をあげた彼女の脛に接吻をした。ぼくは、とつぜんこの接吻をきっかけとして、なにか新しい憐憫のようなものを感じとった。心は激しい感動であふれんばかりとなり、涙を抑えかねた。

「どうなさいましたの？」とマルスリーヌがたずねた。ぼくらは話をはじめた。彼女の魅力あふるる話題に、ぼくはうっとりとなつた。ぼくはぼくなり、女を愚かしいものときめてかかつていたのだが、その夜彼女のそばにいて、ぎこちなく間抜けに見えたのはぼくのほうだった。

こうして、ぼくが自分の生命を結びつけた女には、それ自身のリアルな生命があつたのだ！ この重大な感慨にその夜ぼくは、なんども目をさました。なんども寝台に身を起こし、片方の低い寝台で眠っているわが妻マルスリーヌの姿に目をやった。

あくる日はすばらしい晴天だった。海はほとんど風いでいた。のんびりした会話をしているうちに、ぼくらの気づまりもいっそう少なくなつた。ほんとうに結婚生活がはじまっていたのだ。十月の晦日の朝、ぼくらはチュニスに上陸した。